

第8回水難学会総会・学術講演会（平成30年・東京都）発表抄録（一部省略）

消防が保有する資器材を用いた出張ミニういてまて教室について考察する

1・諸言

平成 24 年から始まった三郷市着衣泳法普及推進事業のこれまでの経過は、昨年の本学会において報告した。今回はこれまで当市では市内小学校で行う、ういてまて教室が中心であったが、新たな世代層への普及を模索した結果、イベントにおいて消防が保有する資器材を用いて出張ミニういてまて教室を開催したため報告する。

2・イベントの内容

当市では、9月9日の救急の日に合わせてみさと救急フェスタを毎年開催している。本イベントでは当市の命を守る取り組みを市民に広くPRする場として毎年数千名が来場する。平成 27 年から始まった本イベントは、第1回目にフットサルの試合中に胸部にボールが当たり心臓震盪により心肺停止となりバイスタンダーの適切な処置で社会復帰した体験談をフットサル選手に講演していただき、第2回では助産師による「いのちの授業」や埼玉県防災航空隊の防災ヘリをイベント会場に離着陸させ防災ヘリ見学会を行った。第3回となる昨年度は埼玉県のとくドクターヘリフライトナースによる講演やドクヘリ資器材展示、企業等によるブース出展や協賛を募り官民の連携を図った。

3・方法

本イベントにおいては、ういてまてをPRするブースは以前から設けていたが、事業のパネル展示とランドセルや運動靴を水槽に浮かべ身近にある浮力体を展示する程度のものであった。今回、本イベントにおいて新たにういてまてを体験するブースを設置できないか検討したところ、消防機関で保有している簡易防火水槽を使用することにより、出前でういてまて教室を行うことができるのではと考え、調整を図った。使用した簡易防火水槽は横 1.8m×縦 3.6mの長方形で当市が保有する最大のものを使用した。実施にあたり課題となったことは①水深をどの程度にするか②簡易防火水槽への水入れ方法③水質管理④体験人数の設定⑤着替えの問題⑥指導員数と指導方法⑦天候・気温などであった。

4・結果と考察

①水深にあっては幼児が体験することも踏まえ 50 cmとした②安全面を考慮した結果、当日に速やかに水入れを行う必要があり消防車のタンク水からの充水とした③遊離残留塩素濃度等の測定を定時的に行った④1コマ 15 分間で 10 コマとし1回あたり6名を上限とした⑤ワンタッチテントを配置した⑥3名の専任指導員を配置し、ランドセルやライフジャケット等を用いての背浮きを体感させることを到達点とした⑦気象条件による中止の判断は学校の基準に準じた。当日は、晴天に恵まれ残暑により絶好のういてまて日和であった。体験者数もすべてのコマで埋まり、主に未就学児が多く参加、それに伴い保護者が簡易防火水槽の周りから見守り、親と子で学ぶ理想的な講習風景であった。また、イベント会場は屋外に大規模遊具が設置されている施設であり、その近辺にういてまて体験ブースを配置したことで多くの利用者に対し「ういてまて」をPRすることができた。そして初の試みであるういてまてアンケートも行うことができた。このような方法を用いることにより、これまででは学校や施設など限られた場所に出向いてういてまてを行っていたが、どの消防機関でも保有している簡易防火水槽を用いることにより出張ミニ講習を行うことができた。またイベントにおいて行うことにより、これまで小学生が主なターゲットであったが幅広い年齢層に対してPRすることができ、ういてまての普及に繋がる新たな方法が加わったと感じた。